
ブラザーCOMPLEX

はにはな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブランザーコンプレックス

【著者名】

はにはな

N5488D

【あらすじ】

親の再婚でアーチキと俺に義理の妹が出来た。それからアーチキの俺への執着はひどくなつて……！？

アーニーと俺と愛佳（前書き）

BLにするかしないかまだ決めていないのですが、BL風味なので苦手な方は、注意下さい。

アニキと俺と愛佳

「帰るぞイサ」

低い重圧のある声。なのにどこか色氣がある。

…そう評したのはうちのクラスのやつだつただらうか。

「アニキ、わざわざ迎えに来なくていいって言つてるの…」

ため息をついて俺は椅子から立ち上がる。

廊下へ出るとアニキは俺のクラスの奴らにつかまっていた。

「郡山先輩、これ調理実習で作ったんです。食べてください」

「あたしのも食べてください」

「あたしのも」

……おい、俺が授業中にクッキー（になるはずだったもの）を焦がしたとき、一つもくれなかつただらおまえら。

…俺はまたため息をつく。

こいつらが騒ぐのも無理はない。

アニキは顔がいい。

高く整つた鼻。切れ長の目。少しどがつたあご。中学生時代バレーをやつていたためか背も高い。その上成績は全国でも上位に入るくらいイイ。そして先週付き合つていた彼女と別れた。

俺はまたまたため息をつく。

「お兄ちゃんおかえり」

別れた原因は…。

もしかすると俺…なのだろうか。

長い黒髪が腰のところでふわりと揺れる。

大きな目が子犬のようで可愛い。

家に帰ると愛佳が嬉しそうな顔で迎えてくれた。

「…そのお兄ちゃんに俺も入ってるのか？」

見とれた俺の横で、低い声を一段と低くしたアーチが嫌そつてつぶやく。

「あんたに言うわけないでしょ。あたしは勇雄お兄ちゃんに言つたの。あんたなんか翔良で十分。

こおりやま しうりょう、あーもうなんて長くて言こいくつ名前かしら」

「……親に言え」

「た、ただいま愛佳。や、そうだアーチ、クッキー貰つてただる。愛佳にあげたら? アーチ甘いの苦手だろ」

「コイツにやるくらいなら近所のガキにやるほつがましだ」

「あたしだつてあんたにもらうくらいなりそこの河岸で浮浪者のフリして道行く人に恵んでもらつたほうがマシだわ。」

言いあつている二人の間に火花が見える。

……ああもうつづため息もない。

先週アーチと俺の父親が再婚した。

相手は愛佳の母親だ。

よほど相性が悪いのだろう。一緒に暮らして以来この一人はずつとこんな調子だった。

……何かが唇に当たる感触がする。

「ん……」

……なんだろ? まあ……いいか……ねむ……

。

「……………勇雄おこーちゃん」

「……………ん

俺は身じろぎして田を覚ました。

「お兄ちゃん、起きた? タジ飯のお買い物行かない?」

「愛佳……」

さつきのは氣のせいだつたのだろうか。

俺はうたたねしていたソファーから身を起こした。

「今日も愛佳が作ってくれるのか?」

そういうつて笑うと愛佳の顔が少し赤くなつた。

「う、うん。ごめんね昨日は失敗しちゃって」

昨日から両親は新婚旅行に行つてゐる。

そのため昨日の晩御飯は愛佳が作ってくれたのだが、ビルやら料理はあまりやつたことがなかつたようだ。アニキにこいつどくけなされていた。もちろん愛佳も言い返していたのだが。今日はそのリベンジだらうか。

「うん、いいよ。行こうか

俺がそう言つと愛佳は嬉しそに笑つた。

……可愛い。

ほんとうに可愛い。

両親の離婚で三年もの間男所帯だつたせいが、俺は一つの中学に通う愛佳がはじめから可愛いくて仕方がなかつた。

「今日もマズイ飯を食わすつもりか

玄関で靴を履いていると2階からアニキが降りてきた。

「うつ。今日は失敗しないわよー」

愛佳が真つ赤になつて怒鳴る。

「昨日の今日で何を言つてるんだ。一日で料理が上手くなるわけが

ないだれり。」

そつ言うとアーニキは愛佳の持つていた靴を奪つて階段上へとまくつり投げた。

「あ～つ。なにすんのよー！」

そしてアーニキは俺の腕を掴むとドアを開けて走りだした。

「ア、アーニキ？」

「あ～、ちょっと。嘘。翔良のばか～つー！」

愛佳の叫び声は近所中に鳴り響いた。

「…………アーニキ。ちょっとひどいだろ、さつきの……は……」

俺は息を切らしながら問い合わせる。

「何がた。」

アーニキは息一つ切らしていない。スーパーまで歩いて15分の距離を全力で走つてきたのにもかかわらず……だ。いや、全力だったのは俺だけか。アーニキにずっと手を離してもらえずに引きずられた。

「愛佳と一緒にいくつて、俺約束したのに」

「あのマズイ飯をまた食いたいのか」

昨日の晩御飯の味を思い出したのか、アーニキが嫌な顔をする。

確かにアーニキに作つてもらつたほうが旨いだろ。

親父が再婚する前はアーニキが家事をほとんどやつていた。親父と俺が無器用だつたからだ。

「…………いーんだよ。最初から上手く作れる奴なんていないんだから。一生懸命作つてくれるだけで嬉しいんだ」

そう言うと俺は力抜をもつて店内へと入つた。

ポンポン。

後ろからアーニキが俺の頭をなでた。

「なつ……にすんだよアーニキ！ー！」

「いや、いい子に育つたなと思つて
はあ———？」

訳わかんねえ。

つか、目立つことするな。ただでさえアニキは人目を集めるんだ。
ああ、店内の主婦の視線が痛い……。

アニキと一緒にいると目立つて仕方がない。いや、目立つているのはアニキだけだが。

でも一人でいるとその他大勢に埋もれてしまう俺としては、あまり人の目にはさらされたくない。

これだからアニキと出かけるのは嫌なんだ。

「イサ

「ん？」

アニキは俺の肩に手を置くと俺を上からのぞきこんだ。

……俺を上から見るな。

俺の背が低く感じるだろ。いや俺は平均的だ。アニキが高すぎるんだ。

「なんだよ？」

「オレも義母さんが来る前は一生懸命作つてたぞ」

……。

なんだ？

愛佳と競つてるのか？

アニキも以外と子供っぽいところがあるんだな。

……なに笑つてるんだイサ

「え……いや

バレた。声には出して笑わなかつたのに。肩が震えてれば分かるか。

「分かつてるよアニキ、すごく感謝してる」

三年前、母は離婚届けを置いて男と駆け落ちした。俺達を置いて。

俺は中学に入学したばかりで、アニキが中学3年生の時だった。ほとんどの家事をアニキがやってくれた。受験勉強もあってさぞ大変だつただろう。

俺も出来る限り手伝っていたのだが、手伝いになっていたかどうかはあやしいところだ……。

「親父が再婚してくれてよかつたよな。今度はアニキ、受験勉強に専念できるな」

「勉強なんかしなくても受かるさ」

「……今、全国の受験生を敵に回したぞアニキ。

「親父の再婚はいい。よくもあんな美人の嫁を見つけたものだ」
だよな。よくやつたぜ親父。おかげであんな可愛い妹までできて……。
「だがあのガキはよけいだ」

「……」

冷静な顔で人をけなすアニキが怖い。否定したいけど黙つといつ。
ごめん愛佳。

「えーと、今日は何食べる? アニキ

触らぬ神に祟りなしだ。

「……つかれた」

昨日はあれから散々だつた。愛佳は拗ねてご飯を食べないし、アニキは必要以上に俺を構つてきた。そしてなぜか愛佳はますます拗ねた。

愛佳が家に来てからアニキの俺への執着がひどくなつたような気がする。もともとブラコンぎみだったアニキは母親が出ていつてからますます俺に構うようになつた。親父が仕事で忙しかつたから、その分アニキが構つてくれたのだと思う。

でも愛佳が来てからのアニキの俺への構いかたは異常だつた。

学校への登下校も一緒にしたがるし、愛佳と話していると不機嫌になる。昨日のスーパーへ行くときにしてもそうだ。おかしいだろ?

兄弟で手を繋ぐなんて。高校生にもなつてだぞ。

こいつのは何て言うんだつけ。母親に赤ん坊が出来た時に上の子供がするやつ。そう、赤ん坊帰り。

赤ん坊帰り……。うわ、なんてアーティキに似合わない言葉なんだ。

「郡山、なに変な顔してんだ?」

「柳ヶ瀬」

変な顔してたのか俺。うー、恥ずかしい。

柳ヶ瀬は中学からの友達だ。歯に衣をきせない性格でたまに周りが引いたりするが、裏表のない性格で付き合いやすかつた。スポーツ刈りで爽やかな顔立ちのせいか、けつこうモテる。

「いや、まあいつもの顔とそんなに変わりないから気にすんな。」

俺が少し赤くなつたせいか柳ヶ瀬が余計なフォローをいれる。いや、そのほうが気になるだろ。ショックだろ。いつも変な顔してるのか！？俺！！

「お前がモテるのに彼女出来ない訳がわかつた……」

この悪気はないけど口の悪いのが原因だ。

「コイツと付き合うには頑丈な心臓が必要だろ。俺も何度心にキズを付けられたことか。……もう結構なれただけど。

「何失礼なこと言つてんだお前。それより真橋さんが呼んでるぞ、郡山」

失礼なのはお前だ！！

……つて、真橋さん！？

「呼んでるなら早く言え！！」

「わざわざ。お前が変な顔してるから忘れてた」

……まだ言つか。

もうイイ。こいつには構わないでおこづ。それより真橋さんだ。俺に何の用だらう。

俺は急いで廊下へと向かった。

廊下に出ると真橋さんは窓から外を覗いていた。そして俺に気付い

たのかゆっくりと振り返った。

……やっぱり綺麗な人だな。

真橋さんは3年生の中で一番の美人だと言われ有名だつた。
肩までの軟らかな髪が開いた窓からの風にゆれる。顔に付いた髪を
避ける仕種さえも可愛い。

「勇雄くん、お昼休みに呼び出してごめんね。ちょっと付き合つて
くれるかな」

「……はい」

でも俺はこの人が苦手だった。

同じ可愛いなら愛佳のほうが全然可愛い。

真橋さんはアニキがいるときは優しかつたが、俺一人の時は少しつ
めたかつた。アニキが自分より俺を構つのが嫌だつたのだろう。

真橋さんはアニキの元彼女だった。

元彼女と俺とアーニー

「勇雄くん、あたしと付き合ってくれないかな？」

「……………真橋さん？」

昼休み、真橋さんに連れられて屋上にきた俺は信じられない告白に驚いていた。アーニーと付き合っていた時、真橋さんはアーニーにべた惚れだつた。別れたからといつてすぐ元彼氏の弟に惚れるものだろうか。

そもそもアーニーを選んだ時点で俺に惚れないだらう。……って、やめよう。考えたらむなしくなってきた。

「どうかな？」

黙っている俺に焦れたのか真橋さんが問い合わせる。
俺は真っすぐに真橋さんを見て言つた。

「真橋さん、俺のこと好きじゃないですよね。俺、好かれてもいいな
い人と付き合えません」

「……………」

図星だつたのだろう。真橋さんは顔を真っ赤にして言葉に詰まつた。
それでも気を取り直して俺につめ寄つた。

「だつて勇雄くんと付き合えば郡山くんのおつちに行けるでしょ？
それに勇雄くんいつも翔良くんと一緒にいるじゃない。

いつもいつも！…あたし、勇雄くんのせいで翔良くんとあまり会え
なかつたんだよ？そのせいでふられたんだ。だから勇雄くんといれ
ば翔良くんのそばにいられるよね。そしたら翔良くん、きっとあた
しのこと好きになつてくれる。あたし達が別れたの勇雄くんのせい
なんだよ。勇雄くんさえいなかつたら翔良くん、きっとあたしのこ
とみてくれた。だからそれくらい協力してくれるよね？」

「……………」

なにを言つてゐるんだね？よく分からない。

たしかに真橋さんと付き合つていてもアーニーは俺を優先していつた。どこに出掛けたこともまず俺を誘つた。

……でも。俺と付き合つたとしても、アーニーが真橋さんを好きなるわけじやない。結局傷つくのは真橋さんじやないだらうか。

「……………ドキません」

「……………ドリしてー？」

真橋さんは涙目で俺の両腕を掴んだ。

「あたしがあんたみたいなのと付き合つてあげるつていつてゐるのよ！？ありがとう思いなさいよ！…あんたなんか翔良くんのおまけでしかないんだからね！…自分のこと分かつてのー？あんたに断る権利なんかないんだからー！…」

「……………」

つかまれた腕がいたい。

いや……………。
心が……………。

「勇雄」

真橋さんは弾かれたよつて声のした方へと振り返つた。

「……………翔良くん！…」

アーニキは真橋さんを見ない。

「勇雄、捜したぞ早く来い」

「アーニキ……」

今のは聞かれただろ？ だとしたら少しいたまれない。いや、それよりも真橋さんが……。

「翔良くん、あのね、あたしね……」

真橋さんは駆け寄つてアーニキの腕を掴もうとした。
その手をアーニキが振り払う。

……うわ、怒ってる。たぶん話を聞いていたんだろ？

「勇雄、行くぞ」

アーニキは俺の肩を押して歩きだした。

「待つてよ翔良くん……！」

真橋さんはなおも言い募る。

呼び止められてもアーニキは一切振り向こうとしない。

「あたしのこと少しは好きで付き合つてくれたんでしょう！ うだつたら勇雄くんじゃなくてあたしともうと会つてくれたら、きっとあたしのこと好きになってくれる……だから……！」

「……逆だ。勇雄がいるからお前と付き合つた。」

「……え？」

「付き合つのは誰でも良かつた。お前じゃなくてもかまわなかつた」

真橋さんは目を見開いた。

両目からは涙が流れている。

なにを言つてるんだ？ アーニキ。

「アーニキ、もういい。真橋さん泣いて……」

「一度と話しかけるな。オレにも、勇雄にも」

「……！」

「アーニー！」

「いくぞ！」

真橋さんを残して、アーニーに押し出されたように俺は屋上を後にした。

アーニーは最後まで真橋さんを見ようとましなかった。

キーンコーンカーンコーン……

5時限目のチャイムが鳴る。

バタバタと教室へ急ぐ生徒達の足音がする。
でも俺は教室へと続く渡り廊下で足を止めた。
アーニーも立ち止まる。

「勇雄？」

「…………アーニー、ああいう言い方やめてくれ。真橋さん絶対傷ついてる

「お前が傷つけられていたのに？」

「俺はいいんだ。…………でも人が傷つくるのは嫌だ。見たくない」

身内が人を傷つけて平氣でいられるような人間だとは思いたくない。
さつきのは明らかに俺を傷つけた報復だらう。あんなに容赦のない
アーニーは初めてだった。

「…………俺は、お前が傷つくるのは嫌だ。傷つけるのが誰であろう

「…………俺であらうと」
何を言つてゐるんだろう。アーニキが俺を傷つける訳ないじゃないか。

「…………アーニキ?」

アーニキの手が俺の髪に、頬に触れる。

「なに…………」

何をしてゐるんだと言つたとした瞬間、俺はアーニキな抱きすくめられた。

ホントに何してゐるんだアーニキ。俺なんか抱きしめて楽しいのか?

俺は抱きしめられたまま固まってしまった。

んーと、ああそつか。俺が傷つけられて落ち込んでると思つて慰めてるんだ。なんだ、びっくりした。

俺はアーニキの背中を軽く一度たたいた。

「アーニキ、慰めてくれなくても大丈夫だよ。早く教室に戻ろう。授業始まつてゐる」

「…………いいから黙つて抱きしめさせてる」

「アーニキ?」

「少しどいい…………」

「

俺とアーニーと回憶シーン

「真橋さん何の用だつたんだ？」

5時限目が終わると同時に柳ヶ瀬が話しかけてきた。俺が授業に遅れてしまつたせいか、気にしてくれていたようだ。

俺は少しだけ柳ヶ瀬から目をそらして答える。

「いや、別にたいした用じやないよ」

「そりか。ならいいけど」

よかつた。突つ込んで聞かれなくて。あんまり言いたい話じやない。

「そりいえば郡山が行つた後すぐ、お前のアーニーが來たぞ」

「アーニーが？」

「真橋さんに呼ばれてどこかに行きました。つて伝えたけど、お前会つた？」

そういうえば、アーニーが屋上に來たときに搜したつて言つてたよな。何か用があつたんだろうか。

「さつきアーニーに会つたよ。でも何も言つてなかつたけどな。いいや、帰りにでも聞いてみる」

俺がそつと柳ヶ瀬は真面目な顔をして腕組みをした。

「何だ？こんな顔するなんて珍しい。

「…………なあ、郡山」

「何だよ」

「ここの最近、放課後にお前のアーニーが迎えに来るのは何でだ？」

「…………」

柳ヶ瀬の不躾な質問で俺は思い出したくないことを思い出していた。

愛佳達が引っ越してきた晩のことだった。

『イサ、入るぞ』

俺が寝ようとしてフトンをかぶった時、アニキが部屋に入つて來た。

『アニキ、なに?』

俺はすぐ眠くて、ベットに寝たまま返事をした。そのベット脇にアニキが腰掛ける。

『イサ、明日から放課後迎えに行く。教室で待つていひ』

『……なんで?』

『明日からは一緒に下校する』

俺は眠気も忘れて飛び起きた。

『な、なんでだよ!? なんでアニキと一緒になんだよ!?』

『……お前が先に帰ると愛佳と一人きりになるからだ』

親父も義母も共働きで夕方過ぎ迄働いている。家に一番早く帰つてくるのは愛佳だった。

確かに俺がアニキより早く帰れば愛佳と一人きりになるだろう。でもそれが何か悪いのか? 俺が愛佳に何かするとでも思つてているのか? いくら可愛いくとも義妹だぞ。

『なんだよそれ。訳わからんねえ。いいじやないか愛佳と一人になつても。俺、アニキが教室に迎えに来るなんて嫌だからな!!--』

怒鳴つた瞬間俺はベットに押し倒された。

『アニキ?』

『愛佳とあまり一人になるな』

『なんで……』

両腕をアーチの手に押され付けられて動くことが出来ない。

『分かったと言え』

『嫌だ』

『言わないとキスをするんだ』

『……』

アーチの顔が近付く。

『じょ、『冗談だろ?』アーチ』

『本気だ』

アーチは真っ直ぐに俺を見おろしている。

ま……間近で見ても美形だなアーチ。ってそんなことを考えている場合じゃない。

だんだんとアーチの顔が近付いてくる。

『…………どうする?』

口元にアーチの息がかかった。

その瞬間、俺は負けた。

『わ……わかった!! 分かったからアーチ!! 賴むからやめてくれ……』

アーチはゆっくり顔を上げると、目を細めて笑った。

『約束だぞ……』

俺はアーキが部屋から出て行くまで、動くことが出来なかつた。

思い出したくなかった……。

これも突っ込んで聞かれたくなかった。あんまりぞころか口かさけても言いたくない。

「柳ヶ瀬」

卷之三

「どうしても聞きたいうなら教えてやる。そのかわり聞いたあと俺とお前は他人なー

俺は全開の笑顔で言った。

柳ヶ瀬の動きが止まる。そしてゆっくりと口を開いた。

「……聞かれたくないんだな？」

俺は笑顔で頷く。

「分かつた、悪かつた。一度と聞かないからその顔はやめてくれ。
氣色悪い。」

「用はないぞ」

「は？」

学校からの帰り道、俺はアニキに何か用があったのか聞いてみた。
その答えがこれだ。

「なんで俺のクラスまで来たんだよ……」

「昼休みに真橋が一年の教室に行くとクラスの奴に言つているのが
聞こえてな。もしかするとお前の所かもしれないと思つた。」

アニキ、真橋さんと同じクラスだつて。話しかけるなつて言つてた

けど無理なんじゃないか？

「真橋がイサに何をするつもりなのか心配になつてな
……心配して捜しに来てくれたのかアニキ。

「すぐに真橋を追い掛けたんだが、途中教師に捕まつた
ポンツとアニキが俺の頭の上に手をのせる。

「悪かつたなイサ。嫌な思いをさせた」

「……別に嫌ことなんてされてない」

辛いのは真橋さんだ。アニキのことが本当に好きだつたんだろう。
だからアニキと一緒にいる俺にあたつてしまつたんじゃないだろう
か。

アニキのオマケ扱いには少し参つたけど……。

俺が俯いていると、アニキは俺の頭に置いた手を髪にからめて搔き
まわした。

「なつ……にするんだよ……」

「真橋の言つたことは気にするな

「別に気にしてなんかない！」

こんな嘘をついてもアニキにはすぐバレる。でも恥ずかしいだろ。
高校生にもなつてアニキに慰められるなんて。

「俺よりも真橋さんは大丈夫なのかよ」

「ああ、あの後屋上ですっと泣いていたみたいだな」

「だなつて……！」

「そんな他人事みたいに！」

「後ろ」

アーニーは前を向いたまま後ろを指差した。

「なんだ？ 後ろを見ろってことか？」

「え……？」

真橋さんが仲良く腕を組んで歩いている。もちろん相手は男だ。

「なんで……？」

俺はそれを呆然として見つめた。

真橋さんは俺が見ていることに気付くと声を張り上げて隣の男に話しあげる。

「ヤダ。見て、兄弟で帰ってる。恥ずかしいよね高校生にもなつて。ブラコンなんて見てて気持ち悪い。あっちから帰ろ」

真橋さんは隣にいる男の腕を引っ張つて脇道へそれた。

角を曲がる瞬間、隣の男はちらりとアーニーを見ると片手を上げて笑つた。

真橋さんは気付かなかつたようだ。そのまま一人の姿は見えなくなつた。

「アーニー……誰？ 今の奴」

「真橋の新しい彼氏……だろう」

「な、なんで！？ 真橋さんアーニーのことが好きだったんじゃないの

か！？」

俺はアーニーを問い合わせる。

「さあ……。顔の良い奴なら誰でもいいんじゃないのか？」

「えええ……。でも何でさっきの今でもう付き合ってるんだよ！？」

アーニーが何かしたんじゃないだろうな。

俺はアーニーを疑いの目でじっと見つめる。

アーニーは口元に手を当てるとゆっくり口を開いた。

「……オレを悪く言って屋上にいる真橋を慰めるとあの男に言つただけだ。6時限目は一人共教室に戻つて来なかつたな」

はあ
！？ なんだそれは！？

「なんで自分の悪口なんか言わせるんだよ！？」

「真橋のような自信過剰の女は自分の気持ちに賛同してくれる奴になびく。自分を一番好きだからな」

……。そ、そうなのか？

「あの男は前から真橋を気に入つていて。口の上手い奴だから真橋もすぐになびいたようだな。まああまりいい噂のある奴ではないが」「なんでそんな奴紹介するんだよ！」

「真橋も同じようなものだ。俺と付き合つている間も毎晩クラブ遊びをしていたからな」

真橋さんが？ そんな風には見えないのに。

あれ？ そういえば……。

「ア、アーニーもクラブに行つてたのか！？」

「何を言つているんだ。毎晩オレは家に居ただろう。
そういうえばそうだな……。

俺は少し胸を撫で下ろした。

しかしアーニーはそれを知つていて付き合つたんだな。本当に誰でも

良かつたのか……？

俺は我知らずため息をおとす。

アーニは労をせずして真橋さんを自分から遠ざけたのか。あの男に
真橋さんを押し付けて。

「…………

こんなにも簡単に人を動かせるものなの?いや、アーニだからか。

……恐ろしい。

普段俺も気付かない内にアーニに躍らされているんじゃないだろう
か。

台所立て。(前書き)

第3話の後半が変わっています。すみません。

「お兄ちゃん、あたし怖い

「大丈夫だ愛佳。俺が守つてやるから」

「お兄ちゃん……。うん、あたしがんばる。」

七

「お、お兄ちゃん！大丈夫！？」

パンツ。

手を鳴らす音が台所に響く。

俺と愛佳が振り向くと、彼にはアーキからしていた

「ストップ。おまえ達何をやつていいんだ」

俺と愛佳は田を見合わせる。

料理たよな 愛佳

「入れた……ね。オレには投げたよ。にしか見えなかつたかな」
アニキが愛佳をにらむ。

小さな声で愛佳が俺にささやく。

「……だ、ダメだつたみたいだな」

愛佳が料理するのを嫌がるアーニーを俺は何とか説得に成功した。しかし……。

料理初心者の俺たちにとって、冷凍コロッケといえど揚げものは難

題だったよつだ。

「イサ、直ぐにヤケドした所を流水で冷やせ。」「り、流水？」

「……水道の水を流しつぱなしにしてる」「なるほど。流れる水のことか。

「愛佳はヤケドの薬を持って来い」「薬箱どこ？」

「……リビングにあるクローゼットの棚の右上」

バタバタと愛佳がリビングへと向かう。

アニキは箸でコロッケをひっくり返すと腕を流水で冷やしている俺の隣に立つた。

「大丈夫か？」

アニキが心配そうに俺の腕を見る。

「全然大丈夫。少ししか油かからなかつたし」

「そうか」

「お兄ちゃん、薬持つてきたよ」

愛佳が急いで戻つて来る。

アニキは愛佳の持つている救急箱を奪い取つた。

「何するのよ翔良！！」

そして救急箱を開ける。

「ヤケドの薬、どれだか分かるのか？」

「……わ、分かるわよ！えっと……」「れ！」

愛佳は縁の箱を取つて差し出す。

「それは飲み薬。ヤケドは塗り薬だ」

「んーと……じゃあこれ！」「

じゃあつて、クイズになつてるぞ愛佳。

「…………」「れ塗るか？イサ」「

「なんの薬なんだ？」

「親父の痔の薬だ」

愛佳がボトッと薬を落とす。

「え、遠慮しようと……」「……」

親父……痔もちだったのか。

「お兄ちゃん、ヤケド痛くない？ 大丈夫？」

愛佳が不安そうにたずねる。

「大丈夫だよ。薬も塗ったし、全然痛くないよ」

「よかったです。…………」めんね、お兄ちゃん。あたしもう料理しない

俺がヤケドをしたせいでどうやらとても落ち込んでしまったようだ。

「愛佳……」

「その方がいいな。愛佳は料理に向いてない

アーチがご飯の準備をしながら言へ。

コロッケもキレイに揚がったよ! ひだ。

「…………」「……」

悔しそうに愛佳が俯く。いつものように返すことも出来ないようだ。

「…………愛佳、そんなことなによ。やつたことがないから出来ないだ

けで、料理だつたりとやれば出来るよつにならぬ

「お兄ちゃん……」

「やうだ、アーチが愛佳に料理を教えたうどつかな？アーチ料理上手いし」

俺がそつと二人の動作が止まつた。

「……冷凍コロッケもまともに揚げる」との出来ない奴に教える料理などない」

「あたしだつてあんたに教えてもらつてまで作りたい料理なんかないわよ！…どんな授業料を要求されるかわかつたものじやないわ！…いーもん、お母さんが旅行から帰つてきたら教えてもらつもの！」

「…」

よ

「…」

アーチは冷たい顔をして愛佳を見る。愛佳は真つ赤になつて言つた。

「……あたし、ご飯いらぬから…」

愛佳は階段を駆け登り、自分の部屋へと戻る。

「アーチ…」

俺はアーチを睨んだ。

「今のは言ひ過ぎだろ！何でそんなに愛佳に冷たいんだよ…！料理くらこ教えてやつてもいいだろ…？」

「…」

アーチは俺の手取ると腕にある小さなヤケドの跡を見た。

「……あいつはお前にヤケドをさせた。もう一度とお前とは料理させない」

「アーチ、俺が勝手に手伝つたんだよ。愛佳のせいぢやない」

「……そんなにあいつを庇つな」

え？

アーニは俺の手を離すと、飯の準備を再開した。

「イサ、あと少しで出来る。座つていろ」

「わかつた……」

アーニ
…………?
…………?

アーニがなんだか切なそうに見えるのは、俺の気のせいだろうか……。

「ノハシ

愛佳の部屋のドアを軽く鳴らす。

「愛佳、開けていいか？」

そう問い合わせるとドアが内側からゆっくりと開いた。

「お兄ちゃん……」

「ひから泣いていたようだ。大きな瞳が潤んで赤くなっている。

「……愛佳。これ、熱いから気をつけて食べて
ポンッと愛佳の手に、持っていたものを渡す。

「カップラーメン?」

「…………うん、『めん。』」
れしか料理できない

「あははっ」

愛佳が涙目で笑う。

「これ、料理つて言わないよお兄ちゃん

「そりがな」

少しは元気出たみたいだ。……よかつた。愛佳は笑っているほつが
いい。

「ノハシ、そうをました」

愛佳はカップラーメンを食べ終わると、椅子から降りて地べたにいる俺の隣に座った。

「お兄ちゃん、ヤケドせねやつて、ほんとに『めんね』

愛佳は田を下に落として悲しそうな顔をする。

…… そんなに落ち込まなくていいのに。

ヤケトは全然たいしたことないし
もしある痕はないでたとしても男
だから気にならない。

「愛佳、謝られるよりもありがとうって言つてもらひうほつが俺は嬉

愛佳が隣にいる俺を見る。

「ありがとう？」

「そう、たとえば……、油から庇ってくれてありがとうお兄さま」とか

愛佳の大きな瞳がますます大きくなる。

「うう。言つてて恥ずかしくなつてきた。

冗談だと言おうとした瞬間愛佳が口を開いた。

「うんっ、庇つてくれてありがとう兄さま。……大好きっ！！」

۱۰۰

今度は俺が大きく目を開く番だつた。

……水牛の聲、第一回が主

「だ、大好きつて……」

「大好き お尻ちゃんにあたしの」と好色じゃないの?」

俺は焦りながらもやうやくつた。愛佳が嬉しそうに笑う。

言って良かった。元気が出たみたいだ。

……しかし、恥ずかしい。大好きなんて言葉、ここ数年誰にも言つたことないぞ。でも、言わるとかなり嬉しいものなんだな。しか

も「こんなに可愛い義妹から。少し……いや、けっこつぱりキドキした
べ。

「お兄ちゃん、あたしゃぱぱお母さんから料理教えてもらひうーだ
からお兄ちゃん、上手になつたらあたしの手料理食べてね
「うと、楽しみにしてる」

愛佳と田を合わせて笑い合ひ。

愛佳はもうこつもの明るい表情に戻っていた。
俺は愛佳のこいつの素直なところに関心する。

……アーチと正反対だからだろうか。

本当に可愛いやな。義妹になつたのが愛佳でよかつた。

「お兄ちゃん。あたしね、翔良より料理上手になつて絶対に見返し
てやるんだ」

愛佳はぎゅうといふしを握りこむ。

「…………」

愛佳、もしかして俺がヤケドをしたことより、アーチに言ひ負かさ
れただことで泣いていたのか?……悔し泣きか?
俺は笑つてため息をつく。

まあいいか、そのほうが愛佳らしい。この調子だと本当に料理が上
手くならうだな。楽しみだ。

「郡山、なんかあつたのか？今日はやけに嬉しそうだな」

「や、そうか？」

放課後の教室で、俺はアニーを待っていた。柳ヶ瀬も一緒に残つて付き合つてくれていた。

……俺、そんなに嬉しそうな顔してたのか？

今日は新婚旅行から親父達が帰つてくる日だった。

確かに嬉しいかもしない。親父に会えることがじゃなく、これでやつとアニーと愛佳の言い争いに俺だけがが巻き込まれる回数が減る。

これからは親父たちもあの一人を仲裁をしてくれることだらう。……たぶん。

「親父たちが旅行から帰つてくるんだよ。お土産が楽しみだ」「そうか、お前ん家再婚したんだつたな。そついえば義妹可愛いんだろ？今度紹介してくれよ」

「……絶対いや」

俺が冷たく言うと柳ヶ瀬がむくれる。

「なんだよケチ。このシステム」

うわ。ムカツク。こんな口の悪い奴を愛佳に紹介して愛佳の心が傷付けられたらどうする。心配で呑わせられない。それよりも心配なのは俺が今まで柳ヶ瀬と友達でいられるかだが。

「……イサ」

低い声が響く。すると、クラスの女子ならず男子までもがドアの方を振り向いた。

……もう毎日こんな状態だ。いい加減なれど、お前ら。って、柳ヶ瀬。お前も見とれるな。

「相変わらず、すっげえ存在感だな。お前のアーニキ」
ボソッと柳ヶ瀬が感想をもらす。

……そんな感想いらない。

もう少し労ってくれる友人が欲しい。こんなアーニキを持つ俺の身にもなってくれ。平安な人生はまず望めない。……うつ、自分は普通すぎるほど普通なのに。

そもそも何で柳ヶ瀬と友達になつたんだっけ。

アーニキとの帰り道、俺はそんなことを考えていた。

俺が中学校に入学した時、学校中でアーニキの顔が知れ渡っていたせいで、俺はクラスの奴に遠巻きにされていた。どうもアーニキの弟ということで近寄りがたかったようだ。

そんな時だった。柳ヶ瀬が俺に話し掛けてきたのは。

「おい、郡山。お前のアニキ今日初めてみたよ。すっげーカッコイイのな！」

興奮したように柳ヶ瀬は語る。

「……そんなことないよ」

俺は目を逸らして答えた。

「そんなことないわけあるか！」

柳ヶ瀬は俺の頭をペシッとはたく。
な、なんだ？ なんではたかれるんだ！？

「あんだけの美形のアニキをそんな風にいうな。謙遜ビリカかかえ
つて嫌味だ。ボケ」

……ボケって。

ムカつかなかつたと言えば嘘になる。でもそんな風に俺に接する奴
は初めてだつた。

それ以来柳ヶ瀬は俺に話しかけるようになり、俺も柳ヶ瀬に話しか
けるようになつた。

そしていまだに付き合いは続いている。

「……俺はマゾか？」

「は？」

アニキが変な顔をする。

うわ、俺いま声に出してたのか！？

「い、いや。何でもない。独り言」

俺は慌てて顔の前で手を振つた。

俺はマゾなわけじゃない。柳ヶ瀬が誰とも分け隔てなく接し

てくれたのが嬉しかつただけだ。

そうだ、そういうことにしておこう。

俺は首を縦に何度も振る。

「イサ……。一人芝居か？」

「えつ……」

独り言の上に動作まで付けた俺が不気味だつたようだ。アーティストが俺から一歩遠ざかる。

おお、アーティストに避けられるなんぞ新鮮だな。

……つて、違う！！ホントにマゾなのが俺！？いや、いつもアーティストにはぐつつかれているからそう思つただけだ！！

俺は何とか自分で自分を説得し、意識を逸らさうとアーティストに話し掛けた。

「親父たち、今日帰つてくるんだよな。もう帰つてるかな？」

「そうだな、昼頃に飛行機が到着すると言つていたからな。もう家にいるんじゃないのか」

「そつか。じゃあ愛佳、きつと喜んでるな。久しぶりに母親に会えて」

「そうだな。ガキだからな」

……
。 どいつもか話す話題を間違えたよつだ。

「ええと、今日の夕飯何かな。久しぶりに義母さんが作ってくれるのかな？」
こないだも夕飯の話題で話を変えたような気がするけど、まあいいか。

「いや、旅行から帰つて来たばかりで疲れているだろつ。オレが作るわ」

「やつか

……アーチキ、義母さんには優しいのに、なんで愛佳にむかになに冷たいんだ？再婚が気に入らなかつた訳ではなさやつだ。そうだとしたら義母さんにも冷たいはずだ。

「イサ、雨が降りやうだ。早く帰るぞ」

「えー」とをして歩みが遅くなつていたようだ。俺の肩を少し押すようにして、アーチキが早足で歩き出す。

「雨？」

顔をあげて空を見ると、灰色の雲が広がつていた。

アーニーの言つた通り、家に着いて暫くすると画音が鳴り出した。

俺はリビングのソファーから窓の外をちらりと見た。

……だんだん外が暗くなってきた。そのうちカミナリが鳴るんじやないだらうか。

口の字のソファーの左側に座っていた俺は、さつきまで見ていた斜め前に座っている愛佳に目を戻した。

親父と義母に囲まれている愛佳は、声を上げて泣いていた。

…………どうしたらいいんだろ。

向かいに座るアーニーを見ると、何を考えているのか判らない無表情な顔でずっと窓の外を見つめていた。

「やだ、やだ、やだあ。あたし行かない。外国なんて行かない！！ここに残るのぉ！！」

首を激しく振りながら愛佳が叫ぶ。

もう一時間ほど泣いているんじゃないだらうか。愛佳の目は真っ赤になつて、もう田の回りがはれてきそつだつた。

ことの起こりは親父の爆弾発言からだつた。

「俺は今回の旅行で決めた。アメリカで仕事をする」

親父達は新婚旅行にアメリカへ行つた。だけどそれが仕事の転勤の下見も兼ねていたとは、親父達が帰つてきてから初めて聞かされた。義母さんだけは知つていたらしいけど。

「会社の研究所がとても素晴らしい。最先端の機械が揃っていて、今の会社とは比べものにならない」

旅行から帰ってきた親父は、興奮したよつて語つた。

親父は大手の会社の研究所員だ。

腕を見込まれて、アメリカにある本社の研究所から誘いの声がかかったのだそうだ。

再婚したばかりだったこともあるのだろう。親父は話を断ろうとしたらしいが、義母さんは違う所へ行くはずだった旅行先をアメリカへと変更し、会社を見てからと親父に薦めたのだつだ。本当に親父にはもつたないくらいの出来たお嫁さんだ。

そして愛佳も一緒に連れていいくといふ話になり、愛佳が泣き出したのだった。

「愛佳。男の子一人だけのお家にあなたを置いていくことは出来ないのよ？」

義母さんは愛佳を一生懸命に諭そつとする。

「なんで？ 昨日まではそつだつたじやない……お母さん達居なくても、あたしちゃんとこで生活してたじやない……」

だが、愛佳は一向に引こつとしない。

「数日と数年は違つでしょ？ 今度はこつ帰つてくるか判らないのよ！」

「でも、どうしてあたしだけ行くの？ お兄ちゃんも一緒にダメなの！？」

愛佳は縋り付くよつた田で俺を見る。

……つ、そんな田で見られても辛い。だって、俺はどうしたつて行けない。

「愛佳、勇雄さんを困らせるんじやないの」

義母さんが愛佳をたしなめる。それでも愛佳は俺を見ることをやめなかつた。

「愛佳……」

「…………」「…………」

いや、無理だ。……絶対。

愛佳の視線が痛くて目を伏せる。……やばい。少し息が浅くなってきた。

「義母さん。夕飯に使う材料が足りないので、買い物に出しに行つてもいいでしょうか?」

アニキはそう言うとソファーから立ち上がった。

「え、ええ。雨が降つてゐるから気をつけてね

「はい。」

アニキは、ドア迄歩くと振り返つた。

「イサ、お前もこい」

俺は急いで立ち上がつた。

「うん……」

玄関を出て傘をさす。

俺は大きく息を吸つた。

アニキがあの部屋から連れ出してしてくれてよかつた。また親父やアニキに心配させるとこひつだつた。

俺は昔から…………いや、あの時から、外国でこうキーワードで弱い。もつ、トラウマになつてしまつてゐるのだろう。その時のことを思い出すだけで過呼吸になつてしまつ。

「うん、大丈夫。だいぶ呼吸も楽になつた。…………

アニキは玄関を閉めた後、一步も歩かない俺に黙つて付き合つてくれ

れていった。

俺は振り返つてアニキを見た。

「アニキ、スーパーでいいんだよな
そう言つて俺は雨の降る中を歩きだす。

「ああ」

アニキが後ろからついてくる。

雨のせいか、人影は少なかつた。その道のりを、俺とアニキはゆっくつと歩いた。

雨は時間が立つごとに酷くなつた。

俺とアニキが買い物を終えて家に着いた頃には、カミナリが鳴りだしていた。

リビングへ入ると義母さんは疲れた顔をしてソファーに座り込んでいた。愛佳はまた2階の自分の部屋に閉じこもつているようだ。

帰るなり、台所に向かっていたアニキに問い合わせた。

「……アニキ。俺、夕飯愛佳の部屋で食べていいかな?」

いつもは俺と愛佳が一人きりになるのを嫌がるアニキも、今日は頷いてくれた。

「少し待つて。すぐに出来る」

「お、重い……」

お盆に乗せた一人分のご飯は量が多かつた。階段を昇るのが大変な程に。

「愛佳の好きそうなものが多いよな……」

お盆にはハンバーグやルーから作ったシチュー、サラダやいつもは付かないデザートまで並んでいる。ちなみに愛佳は洋食や甘いものが好みだったはずだ。

仲が悪そうに見えても、ちゃんと愛佳のことをアーキも気にしているんだ。

そう思つと、俺は少し嬉しくなつた。

愛佳の部屋の前に立つて、お盆を下に置いた。

そしてドアをノックしようとした瞬間、カミナリが鳴つた。

「あやあつ！」

部屋の中から愛佳の声が聞こえた。

「愛佳！？」

俺はすぐに部屋のドアを開けた。

愛佳は布団を被つてくるまつていた。

もう一度カミナリがなると、ビクッとふるえる。

カミナリが怖いのか？

愛佳は俺に気付かないようだつた。俺は愛佳にそつと近付いた。

「愛佳」

声が聞こえたのだろう。愛佳は布団をバッと押し退けると、大きな目で俺を見た。

「お兄ちゃんあん！！」

愛佳はベッドの上で膝をついたまま、俺に抱きついた。

震えてる。ホントにカミナリが怖いんだ。

俺は少し緊張しながら愛佳を抱きしめた。

「大丈夫だよ。怖くない。大丈夫」

愛佳は一瞬ピクッと肩を動かした後、ぎゅっと俺にしがみついてきた。少しすると震えは止まったようだった。

しかし、抱きしめた手を離してみても、愛佳は俺に抱きついたままだった。

「愛佳？」

そう呼ぶと首を左右に振つて離れるのを拒否した。

……………びしだらいいんだろ。なんかすつごいドキドキしてきました……自慢じゃないけど女の子抱きしめたのなんか初めてだし！！

俺が内心慌てていると、後ろから腰を強く引っ張られた。

背中が壁にあたる。壁というより、これは人だろ。

顔を後ろに向けると不機嫌なアーニキの顔があつた。

「ア、アーニキ？」

なんか怖いんですけど……。つーか、苦しいんですけど。

アーニキの両腕は俺の腰を強く締め付けていた。

「……なによ翔良。人の部屋に勝手に入つてこないでよ

「……お茶だ」

床を見ると確かにお盆に乗つたお茶が置いてある。……「うッ」か
ら零れてるけど。

愛佳はアーチキを睨んで言った。

「お兄ちゃんから離れなさいよ」

「嫌だね」

「……つ。離れてよ……ちわらないでよ……なんで……なんですよ……？」

「あ、愛佳……？」

愛佳の声が叫び声のよくなつた。大きな瞳からは涙が零れる。
「なんであたしだけ行かなきゃいけないの？いやだよ。あたしここにいたいよ！」

「愛佳……」

愛佳は涙を拭かないままに俺を見る。

「お兄ちゃん……。あたし好きな人がいるの。そばにいたいの。だから、ここを離れたくない」

「……」

愛佳に好きな奴がいる。それは初めて知つたことだつた。でも、それよりも……。

布団を被つたせいで少し跳びはねた長い髪や強い瞳、真つ直ぐに俺を見る視線。それがすごく大人びて見えて……驚いた。

「アーチキ……離して」

俺の声は少しかすれていた。

「イサ……」

アーチキが腕を離すと、俺はすぐに愛佳の部屋を出た。

早足で自分の部屋に入ると、後ろからアーチキが追い掛け入つてき
た。

「なんだよ、くるなよ……」

「イサ……。泣くな」

バレていたのか。泣き顔を見られたくなくて逃げたのに。

「イサ……」

アーチキは俺の前に来ると、手を延ばして俺の頭を胸に押し付けた。

なんだよ、もう。最近アーチキに抱きしめられてばかりだな。

俺は女じゃないんだぞ。

そう思つたけど、なんだかアーチキの胸の心音が心地良くてそのままでいた。

外国に行けない自分も、親父達を説得するすべを持たない自分も嫌だった。愛佳が悲しんでいるのに、なにも出来ない自分が悔しかった。

「……俺、義母さんが愛佳を連れて行きたいって、その気持ち分かるんだ。でも、愛佳が泣いてるのに、ここにいたいって言つってるのに……。どうにかしてやりたいのに……」

せめて俺が外国に行けたなら、少しあは愛佳も寂しさが紛れたかもしない。

好きな奴と離れる辛さも、慰めることが出来たかもしないの。

「泣くな」

アーチキが指で俺の涙をぬぐつ。

そしていつそ強く腕に抱き込まれた。

「愛佳のことは俺が何とかしてやる。だから泣くな」

「アーチキ……？」

アーチキが愛佳のために動いてくれるのか？愛佳と仲が悪いのに？本当に？いや、でもアーチキならなんとかしてくれるのかもしない。元彼女の真橋さんを軽く追い払つたアーチキなら……。

そう考へて安心したせいなのか、アーチキの心音を聞いて落ちついたせいなのか。俺はアーチキの腕の中でゆっくりと眠りに落ちていった。

嫌な夢を見た。

昔の夢。

俺は小学生だった。

お袋がまだ一緒だった頃の夢……。

周りに見える景色は遠い国のもの。

日本ではないどこか。

まだ幼い俺は、国名も知らなかつた。

天高くそびえ立つアパートやお城のような建物が、俺に日本ではないことを感じさせていた。

昔、お袋はこの国で一時期モデルの仕事をしていたらしい。日本人離れしたスタイルや顔に加え、外国では珍しい黒髪が受け、なかなか有名だつたのだそうだ。

この国へ来たのは、お袋がモデル時代の知り合いの結婚式に招待されたからだ。俺もアニキも夏休みだったから、仕事で都合の付かない親父を置いて、三人で旅行も兼ねてこの国へ来たのだった。

披露宴には俺もアニキも出席した。

大きなレストランを貸し切つた華やかな会場。でも外国人ばかりで、何を話しているのかさっぱり分からなかつた。だから俺は、大人達の目を盗んで会場の外へと脱出したのだ。

「イサー！」

俺が外へ出たのに気付いたアーニキが、俺を追いかけてくる。少し怒つているようだ。

この頃のアーニキはまだ中学に入つたばかりだったけど、既に大人のような分別を持ち合わせていた。

「外国は危ないんだ。一人で歩き回るな」

「だつてヒマなんだよ。みんなに言つてるのか、ぜんぜん分かんないし」

「……早く戻らないとお袋が心配する。もし抜け出しがバレたら、怒つてイサが楽しみにしていた海へ連れてつてくれなくなるかもしれないぞ」

「……いやだ」

俺は泣きそうになつた。

「じゃあ早く戻ろう。今ならトマレに行つてたことにして」まかしてやるから

そう言つてアーニキは手を差し延べた。

俺は頷いてその手を取つた。

「いや、取ろうとした。

誰かの足音に気付いたアーニキは、少し後ろを振りると差し延べた手を勢いよく伸ばし俺に覆い被さつた。

その瞬間、大きな音が鳴り響いた。

「え……？」

何が起きたのか分からなかつた。

アーニの体が影になつて、何も見えなかつた。

崩れ落ちるアーニ。

そして、クリアになる視界。

その視線の先には……

少し離れた場所に、知らない男の人が立つていた。

その手に握られているのは拳銃。

銃声を聞いた教会の中の人たちが、慌てて飛び出してくる。

「いやあ……翔良……」

お袋の叫ぶ声が聞こえる。

下に見えるのはアーニと赤く染まる地面。

……なにが、おこつたんだろう。

どうしてアーニはたおれているんだろう。

どうしてこんなにも血がながれているんだろう。

『外国は危ないから』

……おれのせい？

おれが、かつてに外にでたから？
だから？

拳銃を持つた男が狂つたように叫ぶ。

何を言つてゐるのか、分からぬ。
知らない国の言葉。

回りの人ノが男ノを取り捕マえる。

アニキノに駆け寄マつて名前ノを呼ブおぼマ。

……覚えてゐるのは、そこまで。

目ノの前ノがぼやけて、そのあと視界ノが真マつ白マになつた。

「……イ……サ……」

意識ノが無くなる前に、アニキノの声ノが聞こえた気がした。

「アニキ……！」

叫んで、目ノが醒マめた。

胸ノに、手ノをあてる。
心臓ノが、早い。

「……もう、見ないかと思つたのに」

夢ではない、現実に起こったこと。

犯人はお袋の不倫相手だった。

親父から後で聞いたのは、お袋が親父と出会い前に付き合っていた男性だったということ。

親父と付き合うことになり、お袋とその男は別れたが、いつの間にかよりを戻していらっしゃい。

年に数回のお袋の旅行の意味を、その時初めて知った。

お袋が愛人にもらした一言が原因で、男は犯行に及んだと自供した。

『子供さえいなければ、夫を捨ててこの国で暮らすのに
そう、お袋が言ったのだと……。』

男は刑務所に収容され、俺達家族の仲はバラバラになつた。
幸いアーキの撃たれた場所は肩の神経からは少しそれた所で、後遺症は残らず早期に回復した。

でも、家族の仲が回復することはなかつた。

親父は子供には母親が必要だと考えたのか、離婚する気はなかつた
ようだが、お袋が耐えられなかつたらしい。

この一件のあと、頻繁に不倫を繰り返すようになり、俺が中学へ上
がるのを見届けた後、愛人の内の一人と駆け落ちした。

その日はとても晴れていて、穏やかな雲が流れていた。入学してすぐの学校からの帰り道、川添いの桜並木が綺麗で、花の好きなお袋
に教えようと早足に歩いて帰つたのを覚えている。

家に帰るとお袋の姿はなく、テーブルの上には一枚の紙切れがあつた。

お袋の名前の入つた離婚届け。ただ、それだけ。

メモの一言もなかった。

全部が俺のせいのように思えた。

外国は危ないのに、俺が勝手に外へ出たから。
だから、アニキが怪我をしたんだ。
だから、家族の仲がおかしくなったんだ。
だから、お袋が家を出てしまったんだ。

お袋が家を出て、俺は少しおかしくなってしまったのかもしれない。
外国の風景がテレビに映るだけで、呼吸が出来なくなつた。
喉の奥に膜ができたかのように、息が出来ない。

心配したアニキと親父が病院へ連れて行つてくれた。
精神的なもので、外国を見ると嫌なコトが思い出されて過呼吸にな
るらしい。

夜中に夢を見て、飛び起きたこともあった。そう、今のように。

「……汗、気持ち悪い」

ベットから降りて袖口で首を拭う。

そこで昨日の洋服のまま寝てしまつたことに気付いた。

「あそのまま寝ちゃつたんだ……」

シャワーを浴びようと部屋のドアを開ける。

すると、ドアのすぐ横の壁にアニキがもたれかかっているのに気付
いた。

「……なに？」アニキ

「……いや、なんでもない」

俺をひと見すると、そのまま無言で階段を降り始めた。

……俺の叫んだ声が聞こえたんだろうか。

俺もアーニーの後を追つて階段を降りだす。

愛佳のことがあって、外国のことを考えたせいか、久しぶりにあの夢を見た。

背中には汗で洋服が張り付いている。

こんななんじや、外国に行くことは出来ない。

だけど、愛佳が悲しんでいるのをそのまま見ているのは嫌だった。

親父達は俺が何を言つても納得しないだらつ。納得させられるだけのものを、持つていなかり。

でも、アーニーになら……。

力が欲しいと思った。

アーニーに頼るしかない自分。

そんな自分を恥ずかしく思った。

階段上で立ち止まり、先を行くアーニーを見下ろす。

階段を降りるアーニーの背中が、心なしかいつもより大きく見えた。

外国アリヤヒマ 2 (後書き)

“教会”ではなく“会場”です。途中間違つてます。すみません。

「ふう、スッキリした」

シャワーを浴びたあと、タオルで髪をふきながらビングヘと戻る。すると、俺以外の家族全員が集まってソファーに座っているのが見えた。

あれ？ 今日は日曜だよな……。

仕事が休みになる日曜日は、いつも遅くまで寝ている親父までいる。

……もしかして。

これはあれだらうか。

昨日のアニキの、俺がなんとかする”発言。だとすると、行動が早いよなあ……アニキ。

そう思いながらソファーへと近付いた。

アニキが俺に気付いて、目で隣に座るやつに促す。俺はそこに腰を降ろした。

「さて……」

親父がまだ寝足りない顔でまぶたを擦る。

「愛佳ちゃん、みんな揃つたよ。全員に聞いて欲しい話つて何なのかな？」

どうやら愛佳がみんなを集めたらしくてつくりアニキが話をするために集めたんだと思ったけど、どうやら違うやつだ。

愛佳は膝上で手をぎゅっと握りしめると、決意したよつと叫んだ。

「……………ごめんなさい。あたし、外国には行けません」

「愛佳…………あなたまだ何を言つて…………」
義母さんがそう言つて立ち上がろうとするのを躊躇する親父が止める。

そして親父は愛佳に顔を向けた。

「行かない…………ではなく、行けない…………か。

愛佳ちゃん。外国に行きたくない、何か理由があるんだね？」

愛佳は強くうなずく。

そしてまっすぐ前を見て言つた。

「…………義父さん、お母さん。あたし、好きな人がいます」

「愛佳、あなたそんな理由で…………？」

「いいから、愛佳ちゃんの話をきいてびじやないか。な？」

またも話し出した義母さんをやさしく親父が止める。

俺は、親父の人の話を最後まで聞くことのできる部分を尊敬していたりする。結構簡単そうでなかなか出来ないことだからだ。

「あたし…………いまここから離れたら絶対後悔する。だつて好き人のそばにいたいの。離れるなんて嫌。その人に会えなくなるなんて嫌なの。今ここを離れたら、自分が駄目になる。きっと、何もしなかつた自分が嫌いになる…………だから、ごめんなさい。一緒にに行けません！」

膝に頭をついて深くお辞儀をする。

親父は困ったようにこめかみをかいた。

「好きな人…………か。そうか、そうなのか…………ええと、どうするべきかな…………」

今度はやつをとは逆に、義母さんが親父の膝上に手をかざして止めた。

「愛佳、それは初恋？」

真剣な顔をして尋ねる義母さんに愛佳は頷く。

「……初めて、こんな気持ちになつたの。その人から曰が離せなくて、その人が笑うと嬉しくて……でもほかの人と話してゐるみると、なんか苦しいの」

胸に手をあてて、まぶたを伏せる。

薄くあいた瞳に長い睫毛が被さつて、瞳の奥が見えなくなつた。

「こんな気持ちをくれるのはその人だけなの。お母さんたちと離れるのは寂しいよ。だけど、今はこの気持ちを大切にしたいの……」

愛佳と義母さんは瞬きもせずにお互いを見る。

義母さんはふと視線を外すと、ため息をついて笑つた。

「やつ、もうそんな年頃なのね。まだ子供だと思つてたけど……」

義母さんは立ち上がつた。

「お母さん、愛佳の好きな人分かつちやつた。そう、だからそんなにここにいたいのね……」

「えつ……わ、わかつたの！？」

愛佳が恥ずかしそうにうろたえる。

ふふ、と寂しそうに笑うと、義母さんはアーキと俺を見て、深く頭を下げた。

「愛佳はここへ置いていきます。愛佳を、よろしくお願ひします。」

アーキが隣で頷くのが見えた。

「はい。何事も起こらないようにしますから、安心してください。な、イサ」

アーキに話を振られて慌て俺も頭を上下に何度も動かした。

「は、はい！大丈夫です！！」

そんな俺の姿が可笑しかったのか、今度は明るく微笑んだ。

「ホントはあたしもここへ残りたいくらいなんだけどね……」

「お、おー……」

親父が皿を剥いて慌てる。それはそだらつ、一人で外国にいくのは寂しそぎる。しかも新婚で。

そんな親父の姿にみんなが笑う中、愛佳は放心したように下を向いていた。

「愛佳…………？」

俺が声を掛けると、ビクッとして顔をあげる。そしてみると、顔が朱くなつた。

「…………っ！！

あたし、ここに居てもいいの！？外国にいかなくともいいの！？

「…………遅っ！！

俺は思わずつっこんだ。

義母さんが微笑む。

「…………ええ、いいわよ」

愛佳は両手を高く上げると、大声で叫んだ。

「やつこ……つた

…………！」

「…………つるさい」

アーニギが親父達に聞こえないよつ小声で、ボソッと言つた。

まあ、たしかに耳が少し痛くなつたけど。

ああ、でもよかつた。本当に嬉しそうだ。愛佳の明るい顔が見られてよかつた。

「じゃあ、Jの話は終わりね。朝Jはんこしまじゅう

義母さんは台所へ向かう。

「俺はもう少し寝るわ……」

親父はそう言いつと、寝室へと戻った。

「お兄ちゃん……あたし、Jでいいんだってー日本に残れるんだって!!」

愛佳まだ興奮しているのか、顔が朱いままだ。

「よかつたな」

愛佳は深く頷くと、ぐるりと顔をアーニキの方へ向けた。

「…………翔良、ありがと。あんたに言われなかつたら、ちゃんと話さうなんて思わなかつた」

「…………別に、お前のために言つた訳じゃない」

？アーニキが愛佳に何か言つたのか？

「アーニキ……何か言つたの？」

俺の質問にアーニキが答える気がないのを見ると、愛佳が話しだした。

「今日の朝ね、翔良があたしの部屋に来てね……」

『泣かず、喚かず、嘘をつかずに自分の気持ちを正直に伝えろ。真剣に言えば相手の心に届く。それでも駄目な場合はオレが援護してやる。だからきちんと話せ』

「そう、言つてね。みんなを集めてくれたの」

「…………」

ちょっとびっくりした。アーニキのことだから、アーニキが親父達を口で上手く丸め込むものだと、失礼なことを思つていた。

そういうえばアーニキは口は辛辣になることがあるけど、嘘はあまりつ

かないよな……。

「あ、じゃあ朝ドアの所にいたのって、俺の「」と呼びにきたんだア

「キ」

「……まあな」

でもなんで呼ばなかつたんだ？

俺が汗をかいてたから、急がせなこつに言わなかつたのか？

……たぶんそつだらう。アニキは俺にすゞぐ甘い。

こんなに早く行動を起こしてくれたのも、愛佳のためじゃなく、俺
が落ち込んでいたせいだらう。

いや、自惚れではなく。そつだと断言出来るべからず、アニキはブ
ラコンだつた。

「イサ、貸しだからな」

アニキが俺の目をみてそつ告げる。

やつぱり俺のためだつたか……。

「オッケー、分かつたよ。いつか必ず返す」

そう俺が言つと愛佳が少しむくれた。

「あたしの貸しなんだからあたしが返す！お兄ちゃんが何かする
必要ないよー！」

「……だからお前の為に言つた訳じゃなこと言つてこいるだらう。と
いうよりも、オレはむしろお前がここに残るのは不満だ」
アニキがそう言つと愛佳は顔を再び赤くした。今度は怒りで。

「……つーじゃああんたが外国に行きなさこよー！……ていうか、な
んであんたは外国に行かないのよー！」

「イサのいない所にオレが行くわけがないだらう

さうじつとアニキは爆弾発言をかました。

……なにで、アーチー。

俺がそいつでつむ前で、愛佳がさうなる爆弾発言をした。

「 う、ううね！ あんたお兄ちゃんのこと好きだもんね……。
お兄ちゃんの寝込み襲つてキスするへりこだもの……。」

……え？

アーチーが眉を寄せて愛佳を強くにらむ。

愛佳もアーチーをこりみ返した。

……ちよつと、待つて。今、何て言つた？

キス……って、キスのことだよな。

アーチーが、俺に？ なんで？

「 愛佳、なに冗談いつて……。」

やつて笑おうとしたけど、笑えなかつた。

アーチーも愛佳も真剣な顔をしていたから。

だから、笑えなかつた。

静まり返ったリビングの中、アーニキがため息をついた。

そのため息に、俺の肩がビクッとなる。

「 見られてたのか。……一生、バラすつもりはなかつたんだがな」

何を？

「まあ、いい。……イサ。貸しは今返せ」

え……？

隣に座るアーニキの手が、俺の頭を引き寄せた。

瞬間、何が起つているのか分からなかつた。

愛佳の息を飲む音がきこえた。

アーニキの整つた顔がぼやけて見えなくなるくらいに近づかられて、唇に何かが触れる。

キス れていてるんだと気付いて、止めようとした。

「……アーニキ、やめ……っ」

口を開けるとアーニキの舌が入ってきて、さらにキスが深くなる。舌を絡め取られて身体が震えた。

震えたのは怯えか、それとも……。

唇が離れてアーニキの手が頭から外れると、身体はそのままズルリとソファーに沈み込んだ。

頭が真っ白で、何も考えられない。

それでも力の入らない身体をなんとかソファーから起き上がらせて立ち上がる。

このままここにいることはできなかつた。
アニキの顔も愛佳の顔も見たくなかった。
……見るのが怖かつた。

俺は俯いたまま震える足を動かし、逃げるように部屋を飛び出した。

…………夜が明ける。

まだ暗さは残つているけれど、だんだんと空が明るくなつてきた。

窓の外をベットの上に座つて見ていた俺は、ため息をついてベットを降りた。

アーニキが起きる前に学校へ行こう。
学校はまだ開いてないかもしないけど、その時は公園にでも行けばいい。

とにかくアーニキと顔を合わせたくなかつた。

昨日は、一日中部屋で過ごした。体調が悪いと言つて、義母さんも、愛佳も、……アーニキも部屋に入れなかつた。

一晩中考えたけど、訳が分からなかつた。

『 あんた、お兄ちゃんのこと好きだもんね』

好きって、なんだ？

家族としてなら俺もアーニキのことが好きだ。尊敬してゐるし、いつも

助けてもらつて感謝してゐる。

「でも、キスしたいなんて思はない。てか、思つわけない。だつて、男同士だぞ。いや、その前に兄弟だぞ？」

手で髪をくしゃくしゃと掴んで搔き回した。

「あ……、親父達について行きたくなつてきた……」

いや、無理だけだ。
外国、まだ怖いし。

「学校……行こ」

こんな気持ちのままアーキには会いたくない。会つても、どうすればいいか分からぬ。

同じ家にいるからいつまでも避けていられないのは分かつてゐる。でも今は、一日でも、数時間だけでもいいから顔を会わせたくなつた。

着替えをすませて静かに階段を降りる。

リビングの前を通り過ぎると、ふいにリビングのドアが開いた。

「うわ……っ」

驚いて声をあげる。しかしそう夜明け前だと思いだして手で口を覆つた。

アーキかもしれない……。そう思い、緊張しながら振り向いた。

「驚かせた?」「めんね」

そこには申し訳なさそうな顔で立つ義母がいた。

少し安心して、小さくため息をついた。

「いえ、こんな時間に誰かが起きてるなんて思わなかつたから」

そう言つて笑つた俺に義母が話し掛ける。

「ちょっと、勇雄くんとお話したいんだけど、いいかな？」

まだアーキが起きてくるまでは時間があるだらう。そう思つて頷いた。

「え……？」

驚いて口を開けた俺に、義母が少し笑つて今話したことを繰り返した。

「だからね、来週から行くことになつたの。アメリカ」

義母はヤカンを火にかけると、テーブルのイスに座つている俺と向かい合つように腰を下ろした。

「急な話よね。旦那の方は代わりの人がもう見つかつたから、今のがグループ研究から外れても大丈夫なんですつて。でもあたしは違うじゃない？まだ新しい人も決まってないし、今日会社に言わなきやいけなくて、もう気が重くつて」

義母は困つたように眉をよせた。

俺は驚いたまま義母を見つめた。いや、目線だけ向けていただけで、

本当はなにも見えていなかつた。

……来週。そんなに早く。今の状態で？

親父たちがいなくなることを、今は心許なく感じじる。前までは親父たちが外国に行つてしまつても、平氣だと思っていた。無意識にアーニキに頼り切つていたんだらう。アーニキがいるから大丈夫だと思いこんでいた。

でも、今は……

「トーン、という音がして顔を上げた。

「勇雄くん、どうや？」

テーブルに「コーヒー」と「トースト」が置かれていた。義母が席を立つていたことにも気が付いていなかつた。

「……いただきます」

そうは言つたものの、正直食欲が湧かなかつた。昨日から何も食べていないせいか胃が受け付けようとしない。

「食べられない？ お粥でも作ろつか。昨日食べてないものね」

「いえ、大丈夫です」

慌てて朝食を食べ始める。ゆっくりしてこるとアーニキが起きてきてしまう。そう思つて義母に話しかけた。

「あの、話つて？」

「……」

少しためらつた後、小さく微笑んで口を開いた。

「「じめんなさいね。 勇雄くんが大変な時に三人だけにさせてしまつね」

「……え？」

「俺が、大変？」

何のことを言つてるんだろう？

「……「じめん、聞いたやつたの。 昨日、朝「はん出来たときに呼

びにいつたらね、その時に……」

昨日 。

「…………」

なんの事が気付いて真っ赤になつた。

「あ……あれっ、あれは……っ」

口がパクパク開くだけで何の言い訳もでてこない。
どうしよう。なんて言つたらいいんだろう。

でも自分自身さえなにも理解出来ていない状態で、何も言える訳が
なかつた。

「…………あ、あのね。驚いたんだけどね。でも前から翔良くんの勇雄
くんに対する態度つて、兄弟にするよりも甘いなって思つてたのよ
ね。まるで恋人にするみたいっていうか……。だから昨日聞いてし
まつた時、妙に納得しちやつたわ」

思わず食べた朝食を戻しそうになつた。

甘いって……。恋人にするみたいって……。そんな風に見えていた
のか。

そういうえば義母さんとこんなに長く話したの初めてじゃないか?そ
の会話の内容がこれが。

俺は深くうなだれたまま顔を上げるのが嫌になつた。
恥ずかしさと、この会話の中身に嫌気がさして。

「来週の出発はいきなり決まったの。おとついの夜、旦那の会社か
ら電話があつてね。アメリカで急いで取り掛かりたい研究があるか
ら、すぐに来て欲しいんですつて。昨日、翔良くんと愛佳には話し
たんだけど……」

話がふと途切れたので、気になつて顔を上げた。

義母さんはまっすぐに俺を見ていた。

「ごめんね。愛佳が馬鹿なことをして」

「…………？」

愛佳が？ 何かしたつけ？

覚えがなくて首を傾げると、義母さんは少し口の端をあげて笑つた。
「人の気持ちを勝手に他の人が言つてはいけないわよね。その人が
相手に伝える気持ちがないならなおさら…………そんなことも出来な
い子に育ててしまったのね。あたし」

「えつと…………あの…………」

落ち込む義母にどう言つたらいいかわからなくて慌てているとい
きなりリビングのドアが開いた。

ギクリとしてドアの方へと振り向く。

視界に入ってきたアーチキの姿に慌てて目を逸らす。アーチキの目が一
瞬揺れたように見えたけど、気のせいかも知れない。

「俺…………つ、もう行きます…………！」

立ち上がると、義母さんに手を掴まれた。

驚いて見ると引き止めるようにして首を振る。そしてアーチキに話し
掛けた。

「翔良くん、愛佳を呼んできてくれるかな？」

アーチキは頷くと一階へ戻つて行つた。

「あの…………」

手を掴まれていて逃げることができない。手を振り払つ訳にもいか
ない。

「ごめん、勇雄くん。愛佳にケジメを付けさせたいの」

「…………？」

ケジメ？

どうして愛佳が？

義母さんの言つていふことがよく分からぬ。それよりも今すぐに、
ここから逃げたかつた。でもあまりにも真剣な顔で腕を掴む義母さ
んを前に、俺はただアーチたちが降りてくるのを待つことしか出来
なかつた。

『……うわー、ねてないんじゃないか？愛佳』

アーチキが愛佳を呼んでリビングに来た瞬間、そう思った。それほどひどい顔をしていたから。目の人下がかなりやばい。

アーチキはどうなんだろ？ そう思つてちらつと見たけど普段と変わらなかつた。もともとあまりアーチキがひどい顔をしているのを見たことがない。寝ても寝なぐても顔はいつも通りだ。顔の皮が厚いのだろうか？

そんなことを考えた後、すぐに視線を下に落とした。
一人と目を合わせにくい。……いや、義母さんもあわせて三人だ。
昨日のあれを知られたんだと思うと、なんだかもう恥ずかしくて逃げ出したい。
そもそも義母さんが愛佳につけさせたいケジメってなんなんだ？

「おはよう、二人とも。そこに立つてないではやく座つて」
義母さんがそう急かすと、アーチキも愛佳も無言でイスに腰を掛けた。
……氣まずい。アーチキが隣に座るのはいつものことなのに、体が緊張のせいか強張る。

「さて、一人の朝ごはんは話が終わつた後でね。」
みんなが座つて落ち着くのを見ると、義母さんが手をテーブルの上で組んで話だした。

「翔良くんごめんなさい。昨日、聞くつもりはなかつたんだけど聞いてしまつたの。……やっぱり、無理矢理するのはよくないわ」
グッとのどがむせた。

叱るところはそこなのか？ 無理矢理じやなかつたらいいのか？ 兄弟

なんだけど……。

「ああ、聞いてしまいましたか。ええ、そりですね。すみません」
アーチキが平然と答える。

……なんでそんなに冷静でいられるんだアーチキ。隣にいる俺の方がいたたまれない気持ちになつた。

「親父は気が付いていましたか？もし知らないなら、黙つてもうらえるとありがたいのですが」

「大丈夫。旦那は気付いてないわ。もちろん言わないわよ。旦那が知つたら倒れてしまふわ」

それはそうだろう。俺も倒れたいくらいだつた。

しかしながらこの一人は普通のことみたいに話してゐるんだ？俺は貧血を起こしそうなほど会話の内容がつらいんだけど。はやく話を終わらせてくれないだろうか？

そんなことを思つてゐると、義母さんが愛佳に話し掛けた。

「 愛佳」

さつきまでとは違い、厳しい声になる。

「あなたは昨日、してはいけないことをしたわね」

愛佳はギクリと義母さんを見た。

「人の気持ちを勝手に言つたのはなぜ？いけないことだつて、分かつてるわよね」

愛佳は少し震える声で答えた。

「…………翔良が、あたしを邪魔者扱いしたから…………だから…………」

「そう、だつたら勝手に人の気持ちを言つても言つてもいいの？あなたは家事も出来ないわ。翔良さんにこれから迷惑をかけるのは目に見えてる。それでも残りたつて言つたのはあなたよ。これから邪魔にならないでやつていけるつて、自信を持つて言えるの？」
愛佳は唇を噛んだまま答へなかつた。否定できないことが悔しいんだろう。泣きそうな愛佳をかばいたいけど、母子の会話に口を挟むのははばかられた。

義母さんは一つ溜め息をつくと、愛佳にキツイ目線を向けた。

「愛佳。私が本当に怒っているのは、あなたが卑怯だったからよ」

ビクッと愛佳が肩を震わせる。

「自分の気持ちを言わずに人の気持ちだけを言つたのはどうして?自分の気持ちを伝える勇気がないのに、人の気持ちを言つのは卑怯なことじゃないの?」

「……」「じめんなぞ……」

「あたしに謝らなくていい。謝る相手が誰だか分かっているでしょ」「うう」

愛佳が一瞬黙つた。その後つららうに、でも悔しそうに眉をよせて口を開く。

「…………」「じめん…………翔良」

「別に。気にしていない」

まるでたいしたことがないような、そつけない態度を取る。そんなアーチを見て、ふと思つた。

アーチにとつて、昨日のことであまり意味はないのかもしれない。恋愛感情じゃなくて、ブラロンの延長みたいなもの……だとか。いや、でもあのキスはやり過ぎな気がする……。

「勇雄くん。顔を上げて、真剣に聞いてほしいの。これから愛佳が言つこと」

義母さんの言葉にゆづくと顔を上に向けた。

愛佳が何か俺に伝えたいことがあるんだろうか?

「愛佳、ちゃんと言えるよね。自分のケジメをつけられるわよね」

愛佳はうなずくと、これ以上ないくらい真っ赤な顔で、でも、真剣な顔をして俺を見た。

「何だろ?~そんなに大事なことなんだろうか。

「…………お……こ……ちゃん、あたしね…………」

ガタツ

と、突然リビングに鳴り響いた。音のした方に振り向くと、アニキがイスから立ち上がっていた。

「…………アニキ？」

腕を掴まれて身体を立ち上がらせられる。俺の腕を掴んだままカバンを一つ、俺の分まで持つと、リビングから出ていったとした。

「ちょっとーー！翔良ーーなんでお兄ちゃん連れてくのよ。あたしまだ何も言つてないのにーー！」

ふと立ち止まると、アニキは愛佳に視線を向いた。

「ケジメをつける必要はない。お前は言わなくていい。黙つてろ」「な……んでっ！！！」

「お前の気持ちをイサに伝える必要はない」

切り捨てるようなアニキの言い方に、愛佳の眉が吊り上がる。

「あんたにそんなふうに決められたくない！言つたら言つーー！」愛佳はイスから立ち上がると、早足に俺とアニキの方へと向かって来た。

なんだろ？と思つてみると、愛佳に勢い良く制服の襟元を引っ張られて身体がぐらりとかしげ。

「うわ…………」

転ばないように足を踏み締めると、田の前に首を精一杯のばした愛佳の顔があつた。

唇が、一瞬触れる。

そのとたん後ろから腕を強く引っ張られて、すぐに離れた。

「行くぞ」

不機嫌な声が聞こえた。でも、思考が止まってしまったようになにも考えられない。体を動かせない。動かない俺を、アーニキは引き連つて玄関へと向かった。

愛佳がその後から追い掛けてくる。

「お兄ちゃん！あたし、お兄ちゃんが好きだよ！！」

大きな声で叫ぶ愛佳の声が耳に届く。俺は驚いて振り返った。

それでもアーニキの足が止まることはなかった。俺は無理矢理くつを履かせられると、玄関の外へと連れ出された。バタンとドアの閉まる音がする。

「…………あのガキが」

地を這うみつなアーニキのつぶやく声が聞こえた。その言葉に反応することも出来ず、あれほど避けたかったアーニキと登校することにも気付かずに、ただ呆然としたまま、腕を引かれて学校へと連れられていった。

「う　　つす、早いな郡山」

教室のドアを開けると上半身ハダカの柳ヶ瀬がいた。

「…………ストリップ？」

そう聞くと容赦なく頭をはたかれた。

「これから部活なんだよ。大会近いから着替えて朝練…………つて、おい。そんなに強く叩いたか？いや、叩いたけど。大丈夫か？郡山叩かれたまま下につづくまる俺を見て、柳ヶ瀬は不安そうに問い合わせてくる。

別に、そんなに痛かっただわけじゃなく、柳ヶ瀬の顔を見たら安心して気が抜けた。…………とは、言いたくなかった。

「お前のストリップ見たら気分が悪くなつ…………」

言葉を言い終える前に、さつきよりも強く叩かれる。

「いっつて…………！！やり過ぎだろ柳ヶ瀬！！」

「うるせえ。このナイスボディに向かってなんて言い草だ。失礼な」

「失礼なのはいつもお前の言動だろ！！」

「いつもってなんだよ！いつ俺がお前に失礼なことしたんだよ！」

「おい、自分の口の悪さは無自覚か。柳ヶ瀬…………。

「もういい…………」

力無くそう告げて、俺は自分の席へ向かった。
寝不足で、これ以上言い合つ元気がなかつた。

椅子に座るとすぐに机の上につづつぶして腕に顔をうづめる。

少したつてから、柳ヶ瀬が何もいわずに教室から出て行くのが分か

つた。

自分の他に誰もいなくなつた教室は、静かで眠けを誘う。

うとうとしていると、足音が聞こえて誰かが早足に教室に入つくるのがわかつた。

「 イサ」

自分を呼ぶ声に驚いて顔を上げる。

「 アニキ」

近付いてくる足音に、心臓の音が早くなつた。

「 柳ヶ瀬くんから、イサが具合が悪そだと聞いた」「 どうしてほつといてくれないんだう。今はアニキと話したくないのに。」

「 イサ……」

アニキの手が、ひたに触れる。
俺は勢いよくそれをはらつた。

アニキの顔を見たくないで、ぎゅっと目を閉じる。

「 イサ」

アニキの一歩下がる音が聞こえた。

「 一人で、暮らすか?」

「 え?」

「 もしイサがオレと一緒にいたくないのなら、愛佳を連れて親父たちとアメリカに行く」

また一步、後ろへと下がる。

「どうするかは、イサが決めるといい……」

遠ざかる足音で、アーニーが少しずつ離れていのがわかる。

アーニーが教室を出て行ってしまったからも、目を開けられなかつた。

……一人で……暮らす？

考えたこともなかつた……。

ガツッ

と、何かの落ちる音がした。

「…………悪い、聞いた。ジュース買いに行つたらお前のアーニーと会つてさ、お前のこと言つたんだけど……なんか、言つて悪かつたみたいだな。すまん」

柳ヶ瀬の慌てた声に少し可笑しくなつた。

「…………ははっ。柳ヶ瀬が謝るの初めて聞いた……」

「笑うなアホ。ジュースやんねーぞ」

そう言つてから、下を向いた俺の顔を覗きこんだ柳ヶ瀬が驚いた声を出した。

「こ……郡山」

「俺が具合悪そだだからジュース買つてくれたのか？柳ヶ瀬が優しいなんて氣味が悪いな」

「…………」

柳ヶ瀬はなにも言い返さなかつた。言い返さない柳ヶ瀬も氣味が悪い。

ああ、でもそりゃ、俺が泣いてるからか。

いくら柳ヶ瀬でも、弱っているやつにはいつもの毒舌を吐かないのか。

……アーティが教室を出ていく少し前から、涙が止まらなかつた。

もう、どうしたらいいのか分からぬ。

いろいろなことが起こってなにも考へられない内に、また俺の驚くことを聞かされる。

張り付めていた気持ちが溢れて、涙腺が壊れた。

「…………あ、あ…………つと…………学校、サボるか…………」

困ったよう柳ヶ瀬はそう言つて、机に一部がへこんだ缶ジュースを置いた。

小さく目を開けると、冷えた缶から水滴が伝い落ちるのが見えた。

柳ヶ瀬のめつたに見せない優しさが、胸にしみた。

b e t o o l a t e (前書き)

お久しぶり（すぎ）です。

風が、冷たかった。

足のつま先から身体がどんどんと冷たくなつていくような気がして、靴のまま足先を擦り合わせた。

「 風邪、ひくよな。このままじや 」

柳ヶ瀬と駅で別れてから、家の前まで来てもう30分以上経つ。

柳ヶ瀬はなにも聞かず、一人で電車に乗つて街へ移動したあと、ゲーセンやカラオケで遊んだ。平日の昼間なのに街にはちらほらと学生服の奴もいて、学校をサボつてゐる奴が意外と多いことに驚いた。そして何事もなかつたかのように柳ヶ瀬と駅で別れた。

少し、気持ちが晴れた気がする。

柳ヶ瀬のおかげだと認めるのは悔しいが、遊んでゐるあいだに心中でぐちゃぐちゃになつて濁んでいたものが、体の外へと放出されて少し樂になつた・・・・・気がする。

柳ヶ瀬のおかげだと認めるのはホントにイヤだが。

ただ、心は少し樂になつたものの状況はなにも変わってはいなくて、もう帰つてゐるだらうアニキと愛佳のことを考へると家中に入るのがためらわれた。

「 ・・・くしゅつ 」

しかし、やつ冬に差し掛か^かりつとしているこの時期に学生服のままで外にいるのは本当に寒く、このままでは風邪を引くこと間違いなしだ。

俺は意を決して玄関のドアを開けた。

バサツ

「お帰りなさい」

の声とともに何かが降ってきた。軽い。そして大きい。・・・・バスタオル？

「はい、これ。そして早くお風呂入つてお兄ちゃん

ぐごごいと俺の身体を押す愛佳に戸惑いながらも、渡された服と風呂一式セツトをこぎりしめたまま風呂場へと直行した。

「・・・・あ、愛佳？」

「早くお湯につかってあつたまつて。もうさつとお湯沸いてるから。ずつと外に立つたまま入つてこないんだもん、風邪引っちゃうよ」

・・・・・ずつと見られてたつてことか？

バタンとドアが閉じられ、愛佳の足音が遠ざかっていく。俺は冷たくなった制服を脱ぐとため息をついた。

「愛佳のことも、もちろんと考えないと・・・な

いつもなら直ぐに外へと俺を呼びに来そつものな、じつと家で待っていた愛佳。

愛佳にもなにか思つところがあるのだろうか。

「…………あつたけ…………」

ちやほんとお湯に浸かると、じーじー田口さんと話を始めた。脳がゆっくりとだけ、回転した。

俺を好きだという愛佳。一体いつから？
俺を好きだというアーチキ。本当にいつから？
愛佳はともかく、アーチキと俺は正真正銘の兄弟なんだぞ。…………
全然似ても似つかないけど。

アーチキと離れて暮らしたい訳じゃない。

愛佳にもムリヤリ外国へ行かせたい訳じゃない。

今ままじゃいられないんだろうか。

いられないなら俺はどうしたらいいんだろうか。

「…………あがるつ」

お風呂と不本意ながらも柳ヶ瀬のお陰でリラックスした俺の脳は少し……いや、かなり自分勝手な結論を叩き出そうとしていた。

だって仕方なくないか？俺は恋愛初心者で、まだ誰とも付き合ったこともないし、誰かを強く思ったこともない。

だから、今回だけはズルイと思つ自分が心にフタをすることにした。

それは後に全ての責任が自分に降り懸かってくることになるのだが、その時の俺にそんなことが予想出来るはずもなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5488d/>

プラザ- COMPLEX

2010年10月20日12時42分発行